

シェーンベルク
浄められた夜 作品4

《浄められた夜》は、シェーンベルクの初期の傑作の一つであり、弦楽六重奏曲として作曲された。今回のプログラムでは、後に作曲者自身により編曲された弦楽合奏版による。

リヒャルト・デーメル代表作である詩集『女と世界』(1896)の中の同名の『浄められた夜』という長い詩に着想を得て書かれおり、室内楽曲で標題を持った最初の曲である。当時、ドイツで最も高く評価された詩人のデーメルの詩には、数々の作曲家たちが音楽を手がけている。シェーンベルク自身の初期の歌曲にもデーメルの詩を使っている。また、日本には森鷗外の翻訳で紹介され大正期の詩人に影響を与えた。

シェーンベルクのこの作品は、単一楽章で、デーメルの詩に対応して構成されている。この詩は、デーメル(既婚者)と既婚者のイーダ・アウエルバッハとの大恋愛から生まれ、作者の実話に基づいている。詩は5節で構成されており、「月下の男女の話らい」が題材である。1、3、5節では、男女の1組のカップルが月夜の森を歩く情景が描かれている。西洋では、月の変化が断続的な精神異常をもたらすと考えられ、例えば、月にまつわる英語の単語、lunar(月の)、lunatic(狂った)などがある。また、夜に輝く月が人間の裏に隠された狂気をうつし出すとも考えられる。このような不穏な雰囲気をも音楽でも表現している。2節は女性の衝撃的な告白で、「別の男性の子を妊娠し後悔している。しかし母親としての喜びも味わいたかった。そんな時にあなたに出会ってしまった。」と要約される。そして、4節では男性が自分の子として産んでほしいと暖かく受け入れる。音楽では、前半は不安定な調性で短調が中心となり、女性の絶望的な叫びは半音階進行で表現されている。後半は、長調を主体とし男性の暖かさ信頼感が表現され、月の光の輝きも感じられる。全体を見ると二短調から二長調へ変容している。シェーンベルク自身、レコード用に譜例をあげて詩と照らし合せての解説をしている。

彼の『回想記』の中で、「ヴァーグナー流の技法、ブラームスの展開的変奏技法に倣って作った構造がある」と述べているように、楽器の扱い方、半音階や曖昧な調性を駆使した斬新な音響は後期ヴァーグナーの響きから、不規則な小節数による構造に関してはブラームスの影響が見られる。ヴァーグナーとブラームスの影響を

大きく受けてシェーンベルクの作品の中で彼特有の独創性により融合されている。しかし、ドイツ後期ロマン派の時代、ヴァーグナーとブラームスは対立しており、絶対音楽を信奉する音楽評論家、ハンスリックの支持するブラームス派と相対するヴァーグナー派に派閥が分かれていた。そんな中、その両者からの影響を受けた次世代のシェーンベルクは、両者からの影響を融合し作品を生み出したことは、驚くべきことだったと思われる。対位法的な展開、曖昧な調性の扱いを含み、その後の彼の無調作品につながる兆候が多々見られる。

作曲=1899年
改訂=1899,1905年
編曲=1917,1943年
初演=[弦楽六重奏版]1902年3月18日 ウィーン楽友協会、ブラームス・ザール
(アルノルト・ロゼ、アルベルト・パハリヒのヴァイオリン、アントン・ルジツカ、フランツ・イェリネクのヴィオラ、フリードリヒ・ブックスバウム、フランツ・シュミットのチェロ)
楽器編成=[弦楽合奏版]弦楽7部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、第1ヴィオラ、第2ヴィオラ、第1チェロ、第2チェロ、コントラバス)

ブラームス[シェーンベルク編]
ピアノ四重奏曲第1番ト短調 作品25

1933年にナチスを逃れてアメリカに亡命し、ロスアンジェルスに移住することになったシェーンベルクは、同様の境遇で同地にいた指揮者クレンペラーの提案によりブラームスの《ピアノ四重奏第1番》のオーケストラへの編曲を実現した。自身でも出来上がりに満足し「ブラームスの第5番」と冗談で名付けてもいた。

原曲は、ブラームスが28歳の時にベートーヴェン、メンデルスゾーンの影響を受けて作曲した初期作品であり、彼特有のモチーフ展開や独創的な楽章配置など、構造的な面でも意欲的な作品となっている。シェーンベルク自身、チェロ、ヴィオラのパートを実際に演奏した経験があり原曲を知り尽くしていた作品でもある。長さ、構成は原曲を尊重し、色彩豊かな管弦楽法による編曲を行う。ブラームスの使わなかったE♭管クラリネット、バス・クラリネット、イングリッシュ・ホルンの管楽器、グロッケンシュピール、シロフォンを含んだ多様な打楽器を加えた3管編成による。更に楽器の改良により可能となったホルン、トランペット、トロンボーン¹の金管楽器による早いパッセージを含めて、旋律楽器として金管楽器も多用している。弦楽器に関しては、細かくディヴィジし、異なった奏法による音色の変化も工夫されている。強弱記号においても、各楽器のダイナミクスが注意深く指定してある。原曲では演奏の際にピアノの音が大きくなりがちで弦楽器が全て聴こえないことが気になっており、それが理由で演奏機会が多くないとも考え、それらを解決した作品に編曲することがこの作品に決めた理由でもあった。

シェーンベルクは、ブラームスの様式を厳重に守り、今日存命していたら彼が歩み続けていたであろうことを予測して完成させた。弟子たちとのレッスンで度々ブラームスの分析を行っており、彼の様式と原理を熟知し、実際の演奏経験を踏まえてどのようにオーケストラで響くべきかを把握していたシェーンベルクだからこそ実現できたと言える。彼の初期の作品はブラームスから影響を受けており、著書『音楽のスタイルとアイデア』に含まれるエッセイ「革新主義者ブラームス」も残している。この作品を初演したクレンペラーは、彼の編曲の美しさ、オーケストレーションを絶賛している。

第1楽章 ト短調、アレグロ、ソナタ形式。第1主題を3種類の音域の異なったクラリネットによりオクターブで重ねて始まる。再現部は第1主題第2句から始まり古典的シンメトリーを避けており、管弦楽法でも意識的に工夫されている。

第2楽章 ハ短調、3部形式による幻想的な間奏曲。ダブルリードであるオーボエとイングリッシュ・ホルンと弱音器付きのヴァイオリンの持続音で主題を始める。神秘的な8分音符によるヴァイオリンの伴奏は、ホルン、チェロ、コントラバスへと音色を変えていく。中間部、変イ長調の軽快なトリオでは、5小節単位の変則的な構成となっておりリズムパターンを効果的に使用している。そして再度、主部が繰り返した後、木管楽器、ディヴィジされた弦楽器、弦楽器のハーモニクスにより洗練された透明感のある響きでコーダが終わる。

第3楽章 変ホ長調、3部形式による牧歌的な美しいメロディの緩徐楽章。中間部は、打楽器群により強調された付点リズムを特徴とした行進曲風。

第4楽章 ト短調、ジプシー風ロンド。様々な奏法を応用しブラームスより荒々しく構成。冒頭の伴奏音型の弦楽器による弓の木部で叩くコル・レーニョという奏法や、シロフォンの音色は、ハンガリー・ジプシーの民族楽器のツィンバロム(台形の響板に張られた弦を2本の撥で叩くピアノの原型となる楽器)を模倣している。グロッケンシュピール、シロフォン、タンブリン、スネア・ドラムなどの打楽器群も駆使し、カラフルな管弦楽法により、3小節周期のリズミカルな舞曲的な熱狂で盛り上げる。ブラームスのピアノによるカデンツァはクラリネットが担当し、他の楽器によるトレモロ、アルペジオでツィンバロムの音色を表現している。ソロ楽器群による室内乐的な響きで色彩豊かに変容された後、コーダのストレッタでは、トゥッティによりスピードと緊張感を高め華やかに終わる。

作曲=1861年
編曲=1937年
初演=[シェーンベルク編曲版]1938年5月7日 ロスアンジェルス(オットー・クレンペラーの指揮/ロスアンジェルス・フィルハーモニック)
楽器編成=フルート3(ピッコロ持替1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)、E♭管クラリネット、クラリネット2(バス・クラリネット持替1)、ファゴット3(コントラファゴット持替1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、バス・ドラム、スネア・ドラム、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)